

# ことばにみる日本とアメリカの大学生

飯尾 牧子

## Abstract

This paper tries to shed light on the differences between Japanese and American university students through their daily language. Many studies show that young generation (in this paper, it indicates university students) tends to create new words (so called 'college slang') and use them mainly to strengthen peer solidarity. Styles of word formation and their functions vary in some ways between Japanese and American university students. Moreover, these differences distinctly connected with aspects of their national character.

## 1. はじめに

大学生の言葉遣いが脚光を浴びるようになって久しい。それは、その言葉が標準語と異なる部分が多いために、他の世代の人達に分かりにくい異質なものだからである。これは、日本語でもアメリカ英語においても同様である。

若者達は彼等の話し言葉において、常に新しい言葉を生み出しているが、その持続期間は短くはかないものが多い。彼等はどのようにして言葉をつくり出すのか、そしてそういった言葉が造られる背景には何かあるにかを考察して行きたいと思う。

## 2. 「若者語」・「キャンパス言葉」の位置付け

言葉には、標準となる口語に対して、それとは異なる言葉があるが、それを俗語と言い、「若者語」や「キャンパス言葉」はそのなかに属する。日本語と英語における更に詳しい分類は以下の通りである。

### 2. 1. 日本語の俗語

大きく分類して、キャンパス言葉は若者語の範疇に属し、また若者語は俗語というさらに大きい範疇に属する。(図1参照)

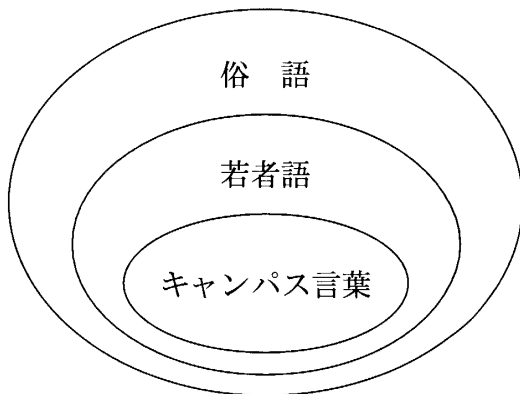


図1 日本語の俗語の分類

「俗語」とは、話し言葉（文章語ではない）で、公の場や改まった席では使えず（使いにくい）いわゆる俗っぽい、くだけた、下品、卑猥、荒っぽい言葉などを指す。俗語の中には、「若者語」「業界用語」「隠語」「卑語」「流行語」「蔑視語」などがある。

その俗語のひとつである「若者語」を米川氏（1996）は次のように定義している。

- (1) 中学生から30歳前後の男女が仲間内で、会話促進、娯楽、連帯、イメージ、緩衝、隠ぺい、浄化などのために使う言葉。規範からの自由と遊びを特徴に持つ語や言い回しがあり、個々の語について個人の使用、言語意識にかなり差がある。また、時代によっても違う。若者ことばともいう。

「キャンパス言葉」は一般に大学生がキャンパスで使用する学校や学生生活に関する言葉を指すが、本論文ではそれよりも広い概念で、キャンパス以外のことや学校に関すること以外についての言葉（いわゆる「学生語」）まで含めている。

## 2. 2. アメリカ英語の俗語

英語では、「俗語」いわゆる“slang”は、「口語」(colloquialisms)とは区別されている。“Colloquialisms”は仕事で使うには正確さにかける、あるいはフォーマルでないとされる語である。一方“slang”とは、主に非公式な場で使われる話し言葉で、ある特定のグループによって使われることが多い。

英語では「キャンパス言葉」のことを“college slang”という。何かが良い悪いとか、人を肯定的否定的に評価したりする言葉がたくさんあり、食べ物、食事、お金、性、人間関係などについての語も多い。日本語の場合と同様にいわゆる「若者語」の中の1つとして属している。

## 3. 「キャンパス言葉」（若者語）の機能とその発生理由

### 3. 1. 日本語

米川氏の分析（1996）によるとキャンパス言葉が使用される目的は以下の7項目の機能を果たすためであると考えられる。

### 1. 娯楽機能

若者語を使って会話に笑いを起こさせ、楽しむ機能。これには2種類あり、「造語時における娯楽」と「使用時における娯楽」とがある。「造語時における娯楽」はその場での思いつき造語を楽しんだりすることで以下のような言葉である。(以下、カッコ内はその語の意味、またはもとの語である。)

- (2) (a)うりふたご (うりふたつ+ふたご)  
 (b)脂ギッシュ (脂ぎった+エネルギー)

また、「使用時における娯楽」は造語自体よりそれを使う事に重点をおいている。

- (3) プリケツ (おしりがプリッと出ていること)

### 2. 会話促進機能

娯楽機能をさらに進めて、若者語を使って会話を盛り上げたり、略語をつかってテンポをよくしたりする機能。会話の「ノリ」を求める若者には最も重要なもの。

- (4) ケンタ君 (お腹の出たまだ中年に達していない男性をからかう語。ケンタッキーフライドチキンのカーネルサンダース人形からきている)

「ちょっと、真奈美の彼氏って完全にケンタくんだよな。」

- (5) (a)発音クリ (発クリニック)  
 (b)クリパ (クリスマスパーティー)

(5)の(a), (b)はもとの単語が比較的長く、テンポが悪いため、短く省略されている例である。

### 3. 連帯機能

くだけた言葉を仲間内で使うことによって親近感をもたせ、「うちの人間」という仲間意識を強める機能。若者語はもともと仲間内の言葉なのでそれを使えば連帯感は深まるが、反対にそれを知らない仲間以外のものを疎外する機能も持っている。

- (6) エナメル (この場合はある特定の男性をさす。いつも持っている鞆がピカピカらし

い。仲間内の4, 5人にしか通じない)

「今日も松戸駅でエナメル見たよ。」

#### 4. イメージ伝達機能

視覚的あるいは聴覚的な単語や表現を用いて瞬間的に物事のイメージを伝える機能。言葉をいろいろ使って説明するよりも簡単にイメージが伝わり、会話のテンポが良くなる。「ノリ」を重視する会話には欠かせない。反対に、語彙不足、表現力不足からきているとも考えられる。

(7) 象足, サリーちゃん (太くてくびれない女性の足)

「ねえ, あの人の足見て!」

「わあ, サリーちゃん (象足) だ。」

#### 5. 隠ぺい機能

既存の一般語を言い換えることで人に聞かれては都合が悪い事を隠す機能。

(8) (a)西海岸へ行く (West coast の頭文字から, トイレに行くこと)

(b)ワールドカップ (World Cup の頭文字から, トイレのこと)

その他, 性に関する語なども多い。

#### 6. 緩衝機能

相手の感情を害したり傷つけたりするのを避けて, 相手への印象をやわらげる機能。

自分が傷つけられるのを避けるために, 他者に対する批判的な言葉は言い換えてやわらかくしている。冗談ばく聞こえ, とげとげしさが無くなり, 言われても気まずい関係にならない。

(9) (a)ブッキー (不器用)

「けいこ, 何やってんの?」

「ボタンとれたからつけようと思ってるんだけど, うまくいかないんだよね。」

「もう, ほんとにブッキーなんだから」

(b)自己中（自己中心的）

「ねえ、伊勢丹のあと丸井と西武もみたいんだけどお。」

「よしこは自己中だなア」

## 7. 浄化機能

その言葉を口にすることで不快な感情を発散させ、浄化する機能。

(10) きも～い（気持ち悪い，気色悪い）

「あのネクタイの柄，きも～い」

## 3. 2. アメリカ英語

英語でスラングが使われる理由としては、可能性として次の4つ（Flexner 1975）が考えられる。

1. 標準英語より力強く，簡潔で，いきいきしている。
2. スラングによって，あるグループに属しているという連帯感，親近感がある。
3. 堅い道徳観念や社会常識に縛られたくない，豪快で愉快的な自己イメージを表現するため。
4. 男らしさを表現するため。（男性は女性より多くの小集団を形成し，その結果多くのスラングを生む，また一般的に男性のほうが直接的で強い表現，誇張，悪態を好む。）

1の理由は，日本語における会話促進機能と重なり，2は日本語での連帯機能，3は日本語の娯楽機能と同じである。また，4は日本語では浄化機能にもなりうる。こう見ると，スラングが使用される目的というのは，日本語と重なる部分が多い。

## 4. 「キャンパス言葉」（若者語）の造語法

### 4. 1. 日本語

大きくわけて，「造語法は既存の語とは無関係な新語を造語」する方法と，「既存の語を利用して新語を造語」する方法の2つがあると米川氏は述べている（1996）。

「既存の語とは無関係な造語」は(11)の様に，擬音語，擬態語などによくみられる。

(11) (a)ウルウル（涙がでるようす，悲しい様子）

「映画みてウルウルしちゃった」

(b)ギョエー (気持ち悪い時や、びっくりした時に発する)

(c)ズコッ (話しのおちなどでつかう)

マンガなどによく出てくるものも多い。「ノリ」を楽しむ若者ならではのものである。

次に、「既存の語を利用した新語の造語」である。借用語によって造られた言葉は次のような単語がある。

(12) (a)アウト (だめ, ださい)

「かれ完全にアウトだよね」

(b)デビュー (今までださかった人がおしゃれになってあか抜けすること)

下の(13)の例は省略語である。実際の単語または文を省略した語が非常に多く、若者語の5つに1つが省略語であると言われている。

(13) (いけ) ぶくろ, (ヘル) メット, (使い) ぱしり, (喫) 茶店, (サラ) リーマン,  
 けば (けばし) い, きも (ち悪) い, フラ (ンス) 語, マクド (ナルド),  
 ケンタ (ツキーフライドチキン), セブン (イレブン), おそろ (い),  
 鼻ピー (ピアス), クリ (スマス) パ (ーティー), いた (ずら) 電 (話),  
 スタ (ー) バ (ックス), ファミ (リー) マ (ート), 着 (信) メロ (ディー),  
 きむ (ら) たく (や), ポテ (ト) チ (ップス), 月 (曜) 9 (時)

(カッコ内は省略された語)

以上を見てみると、省略されて3拍になる語が非常に多い。単に言い易いからか、偶然であるのかは疑問である。

省略語がこれ程多い理由としては、会話のスピード化があげられる。若者の話し方は一般的に早口で、それゆえスピードによって会話のテンポを良くすることは、必須条件である(米川 1996)。また、言葉自身もつ意味が軽くなったため、どんどん省略が多くなったとも考えられる。

なんらかの言葉をもじって、造られるものがある。

(14) 爆睡 (さらに深い眠り)

「今の授業, 爆睡しちゃったよ。」

(14)は、「熟睡」のもじりであるが、「爆笑」などの「爆」という字をつけることによって、程度の度合いを示したものとも考えられる。

また同様に、「超」を言葉の頭につけて「とても」、「すごく」などの程度をあらわす造語がある。

- (15) (a)超ださい (すごく格好わるい)  
 (b)超むかつく (すごく頭にくる)  
 (c)チョコベリグ (超ベリーグッド)  
 (d)チョコベリバ (超ベリーバッド)

一言断っておくと、これら「超」のつく言葉は、現在は高校生が主に使用する言葉で、短大生(大学生)はあまり使わなくなっているらしい。強調語の歴史をみると、戦前には「とても」「だんち」「断然」「がぜん」が流行し、戦後「てんで」「すごく」「激」などがあつた。(米川 1996) このことから、「超」に変わるものがまた、しばらくして使われはじめることは必至である。

婉曲表現を表すものして、「とか」「みたいな」「なんか」「的」「っていううわさ」をつけるいい方がある。

- (16) (a)「学生とかやっています」  
 (b)「今日は授業いきたくないみたいな感じ。」  
 (c)「私的には行きたいなあ。」  
 (d)「わたしって気が強いっていううわさ。」

次に、文法面から造語をみていくと、まず挙げられるのが(17)にある様な「ら」抜き言葉である。

- (17) 食べれる, 見れる, 寝れる, シャべれる, 来れる

「ら」抜き言葉は、批判の対象となって久しいが、57.9%が「気にならない」という調査があり(田中 1996)、最近では多くの世代に受け入れられつつあるようだ。

そして、名詞に「る」をつけ動詞化する言葉がある。

- (18) タクる (タクシーに乗る), コピル (コピーをとる), デニる (デニーズで食事する),  
オケる (カラオケに行く), ドトル (ドトールコーヒーに行く)

すべて, (18)の例は, 動詞化することによって短くなり, 会話促進のために使われている。前出の省略語(13)のように, 会話のテンポをよくする働きがある。

音声面にも, 若者語独自のものがある。まず, カタカナ言葉の平板化現象である。

- (19) (a) アチウンサー (アチウンサー)  
(b) デザイナー (デザイナー)  
(c) ディレクター (ディレクター)  
(d) マップ (マップ)

(19)の例は, 平板化によって意味が変わる事はないが, 「パンツ」や「クラブ」などはイントネーションにより意味が違う語もある (田中 1996)。

さらに, (20)のように, 単語の語尾を上げて話す, 半クエスチョンがある。

- (20) 「サークル? とかの活動って, なんか, 個人の自由? がないような, でも, わいわいがやがや楽しそうで, 友達意識? みたいなものがあっていいなあって」

半クエスチョンは相手の反応を確かめながらはなしている (米山 1996) といわれる。つまり, 自分の意見にあまり自信がない時に使われる。また, 陣内氏 (1998) はこれを「自問イントネーション」とよび自分自身に質問したり, 確認したりしている姿と述べている。

#### 4. 2. アメリカ英語

英語の語彙の数は60万語, そのうちスラングは約45,000語といわれている。Wentworth & Flexner (1975) はアメリカ英語の造語法を以下のようにまとめている。

まず, 意味が変化するものとしては, ある語が1つ以上の意味を持つもの。

- (21) applesauce (アップルソース/でたらめ)

そして, 本来の意味を失い, 1つだけの意味になるもの。



(22) corn (本来は色々な穀物を意味したが、現在では「とうもろこし」のみ)

比喩的にひとつの単語をいろんな意味につかうもの。(23)では dog を4つの意味で使っている。

- (23) (a) My dogs are barking. (my feet are hurting)  
 (b) He is my dog. (friend)  
 (c) She is such a dog (liar), she said she got "A" on that test.  
 (d) That exam was a dog. (bad thing)

そして日本語同様、省略語もとても多い。語尾を省略したもの、語頭を省略したもの、また、その両方のものもある。

(24) sis (sister), bro (brother), cig (cigarette), poli sci (political science), gram (telegram),  
 tec (detective), veg (vegetate), ob (obvious)

省略語の中に、頭文字だけとった語を使うものもある。

(25) C (cocaine), H (heroin), M. J. (marijuana), BS (bullshit), S. O. L (out of luck, 「運が悪く」の意。'shit of luck' から由来する)

これら省略語は隠語のような働きをし、また日本語の場合と同じく会話促進の役割をしていると考えられる。

さらに、他言語からの借用語としての造語もある。

- (26) (a) Let's vamos! (Let's go!—スペイン語で vamos は let's go)  
 (b) chow! (good bye—イタリア語の ciao から)

音の効果による造語としては、擬音語(27)、重複語(28)がある。

- (27) (a) bow-wow (犬) "I saw a bow-wow."  
 (b) bang (-bang) (銃, 銃声)

- (28) (a) okey-dokey (OK)  
(b) yum-yum (tasty)

## 5. 「キャンパス言葉」(若者語) からみた日本とアメリカの大学生

### 5. 1. 共通点

これまで見てきた若者語から、現在の大学生像はどのように映し出されてくるだろうか。

まず、両者の共通点は、日本もアメリカの大学生も、仲間意識をもつために若者語を使っているということである。同じ言葉を使う事で、そのグループに属しているという意識が高まり、より親密度が増す。そして会話のテンポの速い若者たちは「若者語」を使いノリを楽しみながら、親近感、連帯感を感じている。同じ言葉で仲間意識をもつということは言い換えれば、同じ服装をしているもの同士(例えばユニフォームなど)が、強い仲間意識をうむのと同じである。しかし、日本においてもアメリカにおいても、強い仲間意識を保つ為の言葉がゆえに、そうでない外の人に対しては排他的になりうる可能性を持っている。

### 5. 2. 相違点

それでは、日本の大学生とアメリカの大学生が言葉からみて異なる点は何か。

日本の場合、若者語には婉曲的表現が多い。「とか」「みたいな」「なんか」をつけたり、単語を変えなおかつ面白さを付け加え、全体的にふんわりとやわらかくし、ハッキリ言うのを避けている。2002年に「ビミョー」という言葉が全国的に流行ったが、この言葉もまた肯定とも否定ともとれ、状況で判断せざるおえないあいまい化の心理を映し出している(現代用語の基礎知識 2003)。

若者の優しさ志向の表れが、人を批判的に言う事を避けているともいえるのではないだろうか。10代20代というのは傷つきやすい世代でもあり、けんかを好まない仲良し同士、暖かい関係を持続したいという気持ちが強い。常に相手を傷つけず、自分も孤立しない着配りをしている。そして孤立をおそれるがために、はっきりした表現を避け、結果婉曲的表現が多様化される。

「～っていううわさ」という婉曲表現も、「自分がそう言っている」という直接的な表現を避け、客観化したような言い方である。この自己突き放し系の表現から、金田一氏(2003)は若者を「離人症的」と述べている。

また、日本の大学生の場合、それぞれ3, 4人の小グループでしか通じ合わない(うけない)ことばを使っており、横のつながりさえも、付き合いの幅が狭まっているようだ。こういった若者の流行語の多用は縦、横の深いコミュニケーションの断絶に結びつきかねないの

ではないかと感じる。

一方、アメリカ英語の college slang には日本語の若者語のように婉曲表現はあまり見うけられない。slang にせよ、日本語のように曖昧表現を使用する事は、仲間同士であれ、正しく意志の疎通が計れないからではないかと感じる。アメリカのように、人種のるつぼと言われる言語背景も様々な国では、批判にせよ、思ったことははっきりいうのがふつうである。そういった点でアメリカの大学生は、討論が好きで相手と違った意見でもはっきりいい、おたがいにあと腐れもなくさっぱりしているように見受けられる。

仲間との連帯も大切だが、常に基本は「個」であるという自由さが、college slang にも表れている印象を受ける。同じであることより、他と違うことに重点がおかれ、独創的、ユニークであることが大切であると考えられる。

## 6. おわりに

若者語の継続期間はとても短い。そして次々と、新語が造られてくる。今までに述べてきた例の中には、もうすでに使われていないものも多々あると思う。しかし、若者語に限らず言葉は日々変化している。そして言葉はすべてが変わるのではなく、変わる部分と変わらない部分があるのだと思う。若者語はとかく批判の対象となるが、ただ、批判するのではなく。その時代を写しだしているひとつの鏡、すなわち「変化」としてみていくと、もっと印象が変わるのではないだろうか。

本論文では、全体的に比重が日本語に片寄り、アメリカ英語に関するデータが十分でなかった事は否めない。しかし、これからも日本語や英語において若者語がどのように変化し、それがその世代をどの様に写し出しているのか着目していくに値するものとする。

(本論文は2002年12月14日の流山公開教養講座での発表を加筆・修正したものである)

### 参考文献

- 井上史雄 「日本語ウォッチング」 岩波書店 1997年  
 金田一秀穂 「新しい日本語の予習法」 角川書店 2003年  
 陣内正敬 「日本語の現在」 アルク新書 1998年  
 鈴木孝夫 「ことばと文化」 岩波新書 1973年  
 田中晴美, 田中幸子 「社会言語学への招待」 ミネルヴァ書房 1996年  
 Holmes, J. Introduction to Sociolinguistics. Longman. 1992年  
 ムンロ, パメラ編 安吉逸季訳 「最新アメリカ学生スラング辞典」 チャールズ・イー・タトル出版 1992年  
 米川明彦 「現代若者ことば考」 丸善ライブラリー 1996年  
 Wentworth, Harold & Stuart Berg Flexner, Dictionary of American Slang, Crowell Company Inc. 1975年  
 「現代用語の基礎知識」 自由国民社 2003年